

令和二年十二月三十一日庚子年戊子月冬至雪下出麦大晦日 想ふ處を云ふ

生命の歴史はウイルスとの戦いの歴史であったとも言う。この考えには、ウイルス非生物説が隠匿されている。新陳代謝なく、自らエネルギーを作らず、ただ遺伝子を他者に植えて増殖する装置である存在者は生命とは言えない、機械のような存在者であるという訳だ。

生命の戦略の最大のは雌雄の分離であろう。単に細胞分裂する丈では同じ遺伝子の組み合わせのコピーが増えるだけで、型が合うウイルスが出て来たときに一斉に滅してしまふ。そこで遺伝子の組み合わせの異なる者同士が次世代の生命を産めば、鼠算式に異なる遺伝子の組み合わせができるという訳だ。

恋愛が人類の歴史文藝詩歌上、最大の関心事である由縁である。

生命の原理の最大は存続と超越である。

生きたいという個体存続への切望は、畢竟、種としての存続の悲願でもある。個体なくば、次世代もないからである。

又生命は育ち、修復し、鍛え、適応し、変化する。個体としても、種としても、自己超越する。則ち進化である。ただし、これも亦、個体及び種としての存続への希望とも言える。

ウイルスは生命の自己超越のためのカンフル剤でもある。ウイルスとの競り、凌ぎ合いが生命の自己超越活動を大いに刺激している。未来へ向かって、自己を超越して生き残って逝こうとすること、それが生命である。そう思えば、新陳代謝という自己更新すら自己超越の一環と捉えられる。

生命は希望である。畢竟、生命とは希うということであると承知する。

これ以外の選択肢はない。なぜそうなのかを問うても、答は見つからぬ。そもそも答があるであろうか。それすら定かではない。

飽くまで論理の範疇で言えばだが、（「原因」というものはともかくも）「理由」というものは選択肢があつたことが前提となっている。

即ち、「理由」とは、他にも選択肢があつたにも関わらず、なぜそれになったのかという「理由」なのである。

繰り返すが、飽くまでも、「論理」という絡繰りを利用した場合の話ではある。

それを利用する義務はない、と考えるが、その根拠は説明できない。選択肢があつたか

どうかも知らないし、論理の規定上、論理を証明するのに論理を使うことが妥当ではないとされるからだ。という説明はあきらかな矛盾ではあるが（しかも、矛盾とは論理上の出来事である）。

無限ループ、即ち、これも亦、未遂不収に終わるのである。

とてもかくても、我々の立場から見ても、実存的には、生命が希うことであること又は不動であろう。希うとは、未来ということであり、かつ、自己超越である。我々が血脈に、魂魄に連綿と伝わるこの精神、ア・プリオリに在り続ける古来の作法に、有無是非もなく遵うべきであることが妥当と思料する。

以上、西暦二千二十年の末の結語として、かむが考ふ次第。

希ふ

神よ 我らを憐れみたまへ

この弱く儂き者らを

危ふがりて常に怯へ これを免れむと切望し

自らを脱ぎ捨てるかのように

自らを踏み 高みへ

未来へ

逝く

仔細間はず 是非もなく 生命こそが究竟と心得